



2018/19 Annual Report

NPO法人 World Theater Project

2018年度 年次報告書



Contents

- 03 ご支援くださったみなさまへ
- 04 私たちの活動
- 06 事業のご紹介
- 08 移動映画館事業
- 20 スタディツアー事業
- 24 イベント事業
- 30 フィルとムー
- 34 国内支部
- 38 World Theater Project Youth
- 42 様々なご支援のカタチ
- 44 ご支援・ご協力いただいた企業・団体さま
- 46 財務会計報告

Editor
Natsumi Kikuchi

Proofreader / Advisor
Yuya Kamimura

Designer
Tomoko Kawana

2018年度もみなさまのあたたくいご支援によって前進することができました。心より感謝申し上げます。

カンボジアでは定期的上映が行われることに加え、現地映画配達人が警察官と協業し、「人を集める」という映画の特性を使い、映画の前に薬物防止の講義などを行いました。また、現地で想いを持つて移動映画館を実施してくださる個人、団体さまと提携し、バングラデシユ、ネパール、マダガスカルにも上映を広げることができました。

少数民族が多いバングラデシユでは、小学校にあがるときに、これまで使っていた民族の言葉とは違う公用語のベンガル語で授業が始まるため、そこでつまずき学校を辞めてしまう子も多いそうです。そこでバングラデシユに暮らす原田夏美さん率いるChotoBela Worksさんは、アニメ映画『ハルのふん』の、少数民族の言葉とベンガル語の両方の吹き替え版を作りました。楽しいアニメ映画が、子どもたちがまた学校に行きたくなる架け橋になればと考えてのことです。

青年海外協力隊としてマダガスカルに駐在する間に郡山文さんが立ち上げたZOVA an KIDSさんは、上映会を開催した学校の先生から「子ども

たちがより学校へ来るようになった」という感想をいただいたそうです。ネパールでは、ネパール人のビノッドさんご夫妻が、「映画による道徳教育」として移動映画館の展開を開始してくださいました。

すなど、2018年度は活動開始以来、一番動けていない年となりました。動けないなかでも、英治出版オンラインでの連載『映画で貧困は救えるか』を書かせていただくなど、活動について深く見詰め直す機会をいただきました。



「ご支援くださったみなさまへ」

また、青年海外協力隊のみなさまがご連絡をくださり、各地で上映やワークショップを行ってくださるのにも毎回感動しております。

みなさまのご支援は、現地に寄り添って各国で上映される方たちにも届いております。

私自身は恥ずかしながら体調を崩

てしまい、医療従事者の方々もそんな姿を見るのが辛いし、子どもたちを慰める時間もなく苦しまれていたそうです。おもちゃであやしても泣き止むことはなかつたと言います。そんななか、シエムリアップ州から駆け付けた映画配達人ナットが上映を行った1週間、約100件の手術が行われましたが、そのうち泣いた子は一人だけだったそうです。映画が手術前の子どもたちの恐怖を和らげていたとしたらとても嬉しいなと思いました。

カンボジアでは、スマホやタブレットが普及し、農村部でも動画に触れる機会が増えました。それにより、私たちの役割は終わりではないかと思つたことも何度もありますが、進谷先生から、スマホやタブレットがあることで学校に来なくなる子も多いと聞きました。「みんなで映画を観られること」が学校に行きたくなる理由の一つになればいいなと思いました。

私たちの活動が子どもたちのより良き未来の役に立てることを願い、これからも悩みながらも進んでいければと思います。

進ませてくださいているみなさまに、心からの感謝の気持ちを込めまして。

代表理事 教来石小織

なぜ映画なのか？

途上国の農村地域に暮らす子どもたちに将来の夢を聞くと、「先生」や「医者」がほとんどで、将来の夢の選択肢が少ない、あるいは出てこないことに気付かされました。

—知らない夢は、思い描くことができません。

映画は生きていく上で絶対に必要なものではありませんが、心への栄養や、ときに生きる目的を与えてくれるものです。



ラボットさんというカンボジア人の青年は、6歳のときにある映画を観たそうです。その映画のなかには、貧しくても勉学に励み、やがて成功する主人公の姿がありました。



自分もこの映画の主人公のようにになりたい

彼は一生懸命勉強して、現在日本が運営するNPOで活躍しています。私たちは、映画を観た子どもたちに、この青年のように夢の種が宿ることを願っています。

移動映画館が

縦横無尽に広がった一年…

私たちの活動

2012年に始まったWorld Theater Project (WTP) は、カンボジアをはじめとした途上国の農村地域など、映画を観られない環境に暮らす子どもたちへ移動映画館で映画を届けています。

私たちは、様々な世界や生き方を映し出す映画を届ける活動を「夢の種まき」だと考えています。

※これまでに約7万人の子どもたちに映画を届けてきました。
(2019年3月現在)



途上国の子どもたちに映画を
World Theater Project

映画上映

感想

報告

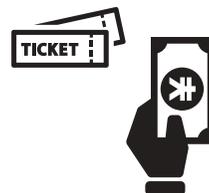
チケット代



途上国の子どもたち

本来映画ビジネスは、鑑賞者が鑑賞料を支払うことで成り立ちますが、途上国の子どもたちには、まだまだ映画鑑賞にお金を支払える余裕がありません。

映画上映の仕組み



活動のサポーター

私たちのプロジェクトは、経済的に余裕のある方に、子どもたちへの映画のチケットをプレゼントしていただくことで成り立っています。



フィルとムー

フィルとムーは、世界中の子どもたちのために移動映画館を行うWTPのマスコットキャラクターであり、理念の象徴として2016年に誕生しました。

『映画の妖精 フィルとムー』で映画デビューを果たしたことを皮切りに、ギフトアイテムに生まれ変わったり、InstagramやTwitterに登場したりと、様々な形でみなさまのもとに旅立っていくようになりました。フィルとムー、二人の「世界中の子どもたちに映画を届ける」という夢が叶う日が来ますように、たくさんの方々に応援していただけますと嬉しいです。

移動映画館

「生まれ育った環境に関係なく、子どもたちが夢を持ち、人生を切り拓ける世界をつくる」という理念のもと、途上国の子どもたちに移動映画館で映画体験を届けています。

これまではカンボジアを主な活動拠点としていましたが、2017年度にたくさんの方々にご協力いただき制作した権利フリー・言語フリーのクレイアニメ作品『映画の妖精 フィルとムー』の完成により、上映権利や言語の課題を乗り越え、カンボジア以外の国の子どもたちにも映画を届けられるようになりました。今では、現地で活動されている団体・個人さまにご協力いただき、バングラデシュ、ネパール、マダガスカルなどに移動映画館を広めることができ、約7万人の子どもたちに映画体験を届けています。今後も映画を観られる環境にない世界中の子どもたちに映画体験を届けるべく、移動映画館をさらに大きく広げてまいります。



国内支部

2016年より関西地域、2017年より北陸地域にて、社会人ボランティア・プロボノとして数名がチームとなり、WTPの活動を広めるための映画関連イベントや活動報告会の開催を中心に活動を行っています。

様々な職種や業種のメンバーが所属しており、それぞれの強みや興味・関心を生かし、WTPの活動をより大きく広げるため活動しています。

World Theater Project Youth (WTP Youth)

2017年5月から、大学生、高校生で構成されるWTP Youthが始動しました。

学生ならではのアイデアや若いエネルギーのもとに、イベント開催、国際協力関連フェスへのブース出展、SNSでの情報発信などを行い、WTPの活動を国内に広めています。WTP Youth独自のVision、Mission、行動指針を掲げ、学生主体で考え、行動し、様々な企画を形にしています。

スタディツアー

旅行会社と協同し、日本からカンボジアへ映画配達を体験しに行くスタディツアーの企画・運営を行っています。

実際の映画配達の体験を通して、WTPがカンボジアで行う移動映画館の意義や現地の子どもの様子をお伝えできればという思いから、2016年にスタートし、これまで計6回開催してきました。アンコールワットなどの観光地訪問や映画配達体験はもちろん、渡航前の事前勉強会や現地での振り返りも充実させ、より学びの多いものになるよう回を追うごとに工夫を重ねています。これまでに高校生から社会人まで、幅広い方々にご参加いただいています。

イベント

「先進国の人がイベントを楽しんだら、途上国の子どもたちに映画が届く」、そんな仕組みを作ることを目指しています。

国内で「Filmeet (フィルミート)」や「丸の内映画ナイト」と称した映画関連イベントや、私たちの活動をお伝えする活動報告会、企業・学校さまとコラボレーションさせていただくイベントなどを開催しています。映画好きの方、カンボジア好きの方、途上国支援に興味をお持ちの方、活動に共感いただいた方など、たくさんの方々にご参加いただいています。イベントでの収益はすべて、子どもたちに映画を届けるための活動資金とさせていただきます。

どこの国でも届けられる
一本の映画が世界へ

移動映画館事業

Movie Delivery

世界各地への広がり

齋藤工さんと板谷由夏さんがパーソナリティを務めるWOWOW『映画工房』の放送300回記念企画として制作の応援をいただいた、世界中の子どもたちに届けられるクレイアニメ映画『映画の妖精フィルとムー』。理念に共感してくださった秦俊子監督率いる素晴らしいスタッフのみなさまによって制作された本作品は、クラウドファンディングで集まった

多くの方々の力と想いによって完成しました。途上国での移動映画館を広げたいと思ったとき、映画の権利の壁にぶつかりました。映画産業を守るために制作側の権利は絶対に必要なのですが、食料やワクチンのように、足りない地域には無償で届けられる映画があってもよいのではと思いました。

そんななかで、どこの国でも上映できる『映画の妖精フィルとムー』という作品を持つことができたため、多くの国の子どもたちに映画を届けることができるようになりました。現在、

現地に縁がある個人や団体の方が上映してくださり、カンボジアのみならず、バングラデシュやネパール、マダガスカルなどにも移動映画館での上映が広がっています。

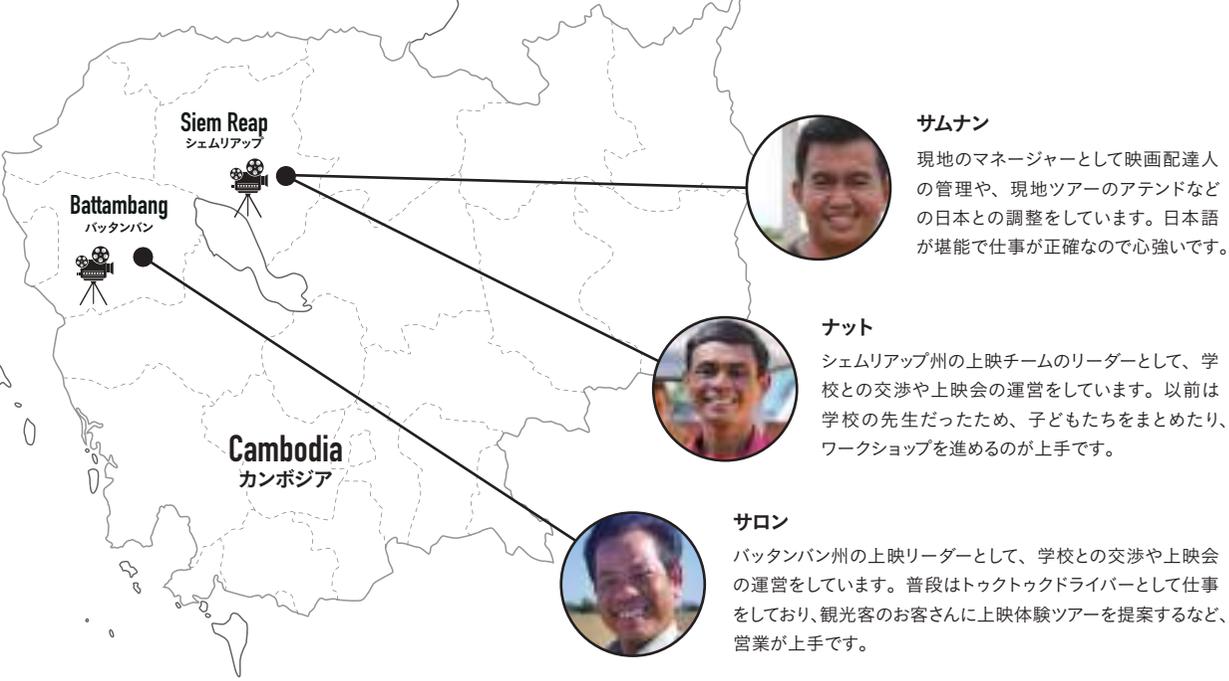
『映画の妖精フィルとムー』に関する権利はWTPが保持しており、上映をご検討くださる方には無償でご提供しています。

「すべての子どもたちに映画体験を届ける」というミッションの実現のためには、事務所すら持たない小さな団体である私たちではまだまだ力不足かもしれません。ですが、2018年度は各国の方々が私たちの活動に共感して移動映画館を展開してくださったことで、一歩ずつではありますが、ミッションの実現に向けて歩みを進めていくことができました。

世界中すべての子どもたちが映画を楽しむことができる、映画により生きる希望を持てる、様々な夢を描くことができる、そのような未来が来ることを信じてやみません。



『映画の妖精 フィルとムー』の上映をお考えの方はこちらから。
国内外を問わず、世界中の子どもたちに映画を届けられるように、協力して下さる方を募集しております。



映画配達人

カンボジアでの移動映画館

1. スケジュールの作成

シェムリアップ州とバタンバン州の映画配達人が、それぞれ上映スケジュールを作成します。学校の休みなどの関係で、季節によって上映頻度は異なりますが、平均して週2回のペースで上映を行っています。

2. 学校へのアポイントメント

広場や寺院など、様々な場所で上映していますが、一番多い上映場所は学校です。授業の関係もあるため、先生に直接会いに行きスケジュールの調整をすることもあれば、電話で決めることもあります。

3. 上映地へ出発

映画配達人は、普段はトゥクトゥク（三輪タクシー）の運転手をしているため、トゥクトゥクで上映機材（スクリーン、プロジェクター、発電機など）を運びます。

4. 上映の準備

スクリーンの組み立て、発電機やプロジェクターの設置、教室の準備（窓を閉めて教室を暗くするなど）を行います。

5. 映画配達人の挨拶

上映前にWTPの活動や上映中の注意点などを話します。

6. 上映

いよいよ上映開始です。発電機が止まるなどの上映トラブルが起きることがあるので、映画配達人は上映の間、教室のなかで子どもたちの様子を見守ります。

7. ワークショップ

上映前後には、映画にまつわるワークショップを行います。例えば、主人公がフルート奏者を目指す『ハルのふえ』を観終わったあとは、フルートの演奏体験を行いました。

8. 今日のふりかえり

ワークショップまで終えたあと、子どもたちに今日の感想や学んだことを発表してもらいます。



カンボジアでは、シェムリアップ州とバタンバン州を拠点として活動しています。シェムリアップ州は、アンコールワットを中心とした観光地として栄えており、年間500万人ほどの観光客が訪れている都市です。バタンバン州は、カンボジア国内で第3位の人口でお米がおいしいことで有名です。現地では週2〜3回上映を実施しており、カンボジア人の映画配達人たちがやりがいを持って学校

2018年度の活動
と上映実績

15,829人
の子どもたちに映画が届きました



や村で移動映画館を展開しています。2018年度は合計1万5829人の子どもたちに映画を届けることができました。また、シェムリアップ州のアンコールトム郡からは、活動の認可証をいただくことができました。このことにより一層現地での上映したい学校との交渉活動などがスムーズになりました。今後はこの実績をもとにして、他の郡や、シェムリアップ州、バタンバン州、カンボジア政府からの認可も得られるように活動を進めていく予定です。

Cambodia
カンボジア



01 ハルのふえ
株式会社トムス・エンタテインメント

アンパンマンシリーズを手掛けたやなせたかし氏の絵本が原作となった、タヌキと人間の親子の絆を描いた感動のアニメーション作品。人間の赤ちゃん・バルを拾ったタヌキのハルは、人間の姿に化けながら、バルを大切に育てていく。成長したバルは、音楽家に笛の才能を認められ、ある決心をする。



"HAL" S FLUTE © Takashi Yanase / TMS All Rights Reserved

02 劇場版 ゆうとくんがいく
株式会社白組

サッカー選手・長友佑都選手をモデルにした主人公・ゆうとくんが、サッカーを通して成長していく姿を描いた短編アニメーション作品の劇場版。世界で活躍するゆうとくんの前に、強大なライバルが出現。さらなる成長を目指し、「レジェンド」と呼ばれる伝説のサッカー選手に出会う旅が始まる。



権利元 株式会社白組

03 ニルスの不しげな旅
株式会社学研ホールディングス

スウェーデンの児童文学が原作となったアニメーション作品の劇場版。数々のヒット作を手掛ける押井守氏が演出を担当し、主人公の冒険の様子がいきいきと描かれている。主人公のニルスはある日、妖精を怒らせ、身体を小さくされてしまう。ニルスは、動物たちと空飛ぶ冒険を始め、友情を深めていく。



権利元 株式会社学研ホールディングス

04 パンダコパンダ / パンダコパンダ 雨ふりサーカス
株式会社トムス・エンタテインメント

スタジオジブリの大傑作『となりのトトロ』の原型と評された、宮崎駿脚本・高畑勲監督のアニメーション作品。竹林のなかの祖母の家で、一人、留守番をする元気いっぱい少女、ミミ子。そこに突如現れた“パンダ親子”とミミ子の愉快な共同生活が始まる。この不思議なパンダはどこから来たのか、そしてささやかな3人の暮らしは、一体どうなるのだろうか。



"THE ADVENTURE OF PANDA AND FRIENDS" © TMS All Rights Reserved

05 シアター・ブノベン
Hanuman Films

ソト・クォーリーカー監督作品。第27回東京国際映画祭「アジアの未来」部門で国際交流基金アジアセンター特別賞を受賞。主人公・ソポンは、かつて祖母が出演していたという伝説の映画を観るため、隠された歴史を探る。そこには、ボル・ポト政権下にあったカンボジアの激動の時代と、祖母の秘密の青春があった。カンボジアと映画、二つの特別な過去が明らかになる。



権利元 Hanuman Films

06 映画の妖精 フィルとムー
NPO法人 World Theater Project

廃墟でひとりぼっちで暮らしているフィル。その表情はどこか寂しげである。そんなフィルの前に突然映写機が現れ、カタカタと鳴るフィルムロールの音とともに古いフィルム映像が映し出される。突如現れたムーによってスクリーンの中に誘われるフィル。フィルとムーの旅が始まる。世界の子どものためにつくられた短編クレイアニメーション。



権利元 NPO法人 World Theater Project



カンボジア人の映画配達人のみによる運営体制になってから2年ほど経ちますが、映画配達人自らが運営を行なっているバタンバン州では、現地の警察官と協業し、映画上映に合わせて警察官による危険薬物防止の講話を実施しています。子どもたちは、短編の映画を楽しんだあとに講話を聞き、その後2本目の映画を鑑賞するという形で上映会を行っています。子どもたちに薬物の危険性をしっかりと理解してほしいとの思いから、映画配達人サロン自ら警察官に営業を行い始まった協業ですが、映画が持つ「人を集める」という特性を生かし、子どもたちが今後の人生を生きていく上で大切なことを伝えられていると感じます。

警察官による危険薬物防止の講話をセットにした上映会



カンボジア人の映画配達人のみによる運営体制になってから2年ほど経ちますが、映画配達人自らが運営を行なっているバタンバン州では、現地の警察官と協業し、映画上映に合わせて警察官による危険薬物防止の講話を実施しています。子どもたちは、短編の映画を楽しんだあとに講話を聞き、その後2本目の映画を鑑賞するという形で上映会を行っています。子どもたちに薬物の危険性をしっかりと理解してほしいとの思いから、映画配達人サロン自ら警察官に営業を行い始まった協業ですが、映画が持つ「人を集める」という特性を生かし、子どもたちが今後の人生を生きていく上で大切なことを伝えられていると感じます。

2018年度のふりかえり
2019年度の目標

2018年度は前年度と同様、日本人駐在員がいらないカンボジア人の映画配達人のみの体制のなかでも安定的に稼働することができました。また、シエムリアップ州のアンコールトム郡からは、活動の認可証をいただくことができました。2018年度でアンコールトム郡の学校は回りきったため、2019年度では別の郡での認可証獲得のために動きたいと考えています。また、彼らのこれまでの経験の共有のために、新たにできた拠点であるネーパールやバングラデシュの映画配達人との交流の機会も設けたいと考えています。

トンポウ 先生

Taphouch 小学校

この活動によって、子どもたちはもっといろいろなことを勉強できるようになると思います。それは学校にとっても嬉しいことです。



ヘンシー 先生

Meta Karona Kror Peu 小学校

『ハルのふえ』は、子どもたちに勉強を頑張るきっかけを与え、明るい将来の夢を描かせてくれる作品だと思います。



チェットピエロット 校長先生

Taphouch 小学校

『ハルのふえ』には、子どもたちがちゃんと毎日学校に来るようになる教育的な効果もあると思います。また上映しに来てほしいです。



映画配達人 原田夏美 (はらだ・なつみ) さん

日藝映画学科卒業後、ドキュメンタリー制作会社の勤務を経て、学生時代に映像制作のテーマにしたバングラデシュに2014年より暮らし始める。少数民族と深く関わり、写真・映像制作を行ってきた。主な活動地はチッタゴン丘陵地帯や国境沿いの地域。現在はロヒンギャ難民キャンプにも活動を広げ、「ChotoBela works」という現地団体を立ち上げ、バングラデシュの子どもたちの「子ども時代 (チョトベラ)」を豊かに彩ることを目標に、移動映画館、アートクラス、スポーツデイなどを開く。また、クミ族とムロ族の子どもたちが寄宿するクニティウという学校をバンドルボン県でサポートしている。



始めに着手したのは「チャクマ語」の吹き替えです。プロの声優はおらず、役者は吹き替え素人の友人たち。場所は私の家で、普段使いの小さなマイクしかありません。熱帯の国ですが、外の騒音を遮断するために録音中は窓を閉めきりました。それでも1日5回流れるイスラム教のお祈り「アザーン」の放送中は、とても録音作業はできません。少数民族の仲間たちは仏教徒なので、しばしの休憩



吹き替え版は
こうして作られた！

2週間ほどかけてようやくチャクマ語の吹き替えが終わり、すぐにベンガル語に着手！…といきたかったのですが、今度はイスラム教の行事である「犠牲祭」がやってきてしまい、(気になる方は調べていただけたいと思いますが)精神的にも活動がしづらい状況に…。しかし、日本アニメが大好き(300本は観たらしい)という友人たちに大いに救われて、最後にはベンガル語版もとても良く仕上がりました。

どちらの言語の作業でも、ある難題が発生しました。それは、「日本語のセリフは長いのに、現地語にする」と短い」という問題です。現地語であっさりと言ってしまうと、キャラクターの口の動きだけパクパク残ってしまう状況に何度も遭遇。「まだ何か喋ってる！」なんて突っ込みを入れながら、セリフを伸ばす工夫を凝らしたのもすてきな思い出です。



ロヒンギャ難民キャンプの子どもたちの声

難民キャンプにはテレビもないし、避難してくる前も映画を観たことがなかったから、今日は運動会も楽しかったけど、一番楽しかったのは映画だった!!

チッタゴン丘陵地帯の子どもたちの声

学校で、しかも自分たちの言葉(少数民族語)で映画を観られるなんて思わなくてビックリした!



2018年度のふりかえり
2019年度の目標

バングラデシュは国土の小さな国ですが、人の数、そして子ども数がとても多い国です。学校に行っていないストリートチルドレンや児童労働をする子どももたくさん。映画配達を手伝ってくれる現地の仲間もいますが、まだまだ多くの地域で映画を届けることはできていないのが現状です。2019年度はもつとめられるようにしたいです。そして、新たにもう一作品の吹き替えにも挑戦できたらいいなと思います。この国は外務省渡航情報で「危険度2」とされているため(2019年6月時点)、大きな旅行会社はスタディツアーを組みづらい状況ですが、いつかWTPのツアーがバングラデシュでも行えるようになって、活動をもっと賑やかに展開できる日を夢見ています。



Bangladesh

バングラデシュ

2018年4月、バングラデシュでの上映活動がスタートしました

バングラデシュではChotoBela worksの原田夏美さんと提携し、移動映画館を定期的に行っていたಿದೆいます。原田さんは、特定言語のない『映画の妖精 フィルとムー』などの上映に限らず、バングラデシュの言語での吹き替え版の制作も行っています。そんな原田さんに2018年度の活動を振り返っていただきました。

2018年1月、バングラデシュから一時帰国中に、共通の知り合いがWTP代表のさおりさんと私を引き合わせてくださいました。昔から心の片隅で「いつか移動映画館をバングラデシュで…」と思っていたので、バングラデシュ支部となり一緒に活動を展開することがすぐに決定しました。

この国に住み、少数民族の人々とながってきた私は、活動するにあたって一つの大きな課題意識を持つていました。それはバングラデシュにおける「言語」の問題です。この国には45の少数民族がいて、各々の言語・文化などがあります。けれど、子どもたちは公教育に入ると公用語であるベンガル語で試験や進学に臨まなければならず、生活のなかでも苦戦することが起きます。そうして少数民族であることへの

誇りよりも、否定や差別を感じて生きる様子を目にしました。

活動開始当初に上映した『映画の妖精 フィルとムー』やDigComGASIAからいただいた作品には言葉がなく、子どもたちの母語が何であっても彼らを楽しませてくれました。だけど、自分の母語で映画を観られる喜びを子どもたちに届けたい。映画を通じて少数民族の子どもたちの言語の橋渡しをしたい。そう考えた結果、WTPと作品の権利元にあるお話しをする。それは、『ハルのふえ』という作品を、公用語である「ベンガル語」と、少数民族の言語の一つである「チャクマ語」に吹き替えさせていただくというものでした。

悪戦苦闘のすえ完成した二つの言語の吹き替え版を持って、9月にはランガマティ県とバンドルボン県の2村8校を回り、1週間で計12回の移動映画館を行うことができました。11月には、2017年にミャンマーからバングラデシュへ大移動したロヒンギャ難民キャンプでの上映も実施しています(ロヒンギャ語の吹き替え版も現在制作中)。2019年1月には、チャクマ族の学生が現地人の映画配達人1号となってくれ、活動の広がりを感じることができました。



2018年4月、ネパールでの上映活動がスタートしました

上映での子どもたちの様子はいかがですか？

『映画の妖精フィルとムー』は心地よい、落ち着いたメロディラインの音楽からスタートするので、子どもたちはとても穏やかな表情でスクリーンを見つめます。ですが、フィルが映画の世界に飛び込みムーとの冒険が始まると、目まぐるしく変わる様々なシーンに釘付けです。

DigiCon6 ASIAからご提供いただいた『The adventure of Egg, Lime and Chilly』では、ライムやタマゴたちは無事キッチンから脱出することができると、子どもたちはワクワクさせられ、キャラクターたちのコミカルなアクションには大笑いです。また、このストーリーからは友人と助け合っって困難を乗り越えることの大切さも学ぶことができたようです。



『ゆめみるシロ』では、カラフルな絵の具たちが混じり合うことで起こるドラマチックな展開に、子どもたちはみんな魅了されます。

映画を観たあとは、グループになって考えたことやお気に入りの場面、将来の夢について話し合います。映画を楽しんだあとの子どもたちはリラックスして、みんな活発に意見を出してくれれます。この活動は子どもたちにとって夢を育むための学びにつながるだけでなく、彼らが日常生活で受けているストレスを軽減させることにもつながっていると感じます。

ネパールでの今後の活動について、意気込みをお願いします。

私たちは今、月に1〜2回のペースで首都カトマンズ近郊の孤児院や移民コミュニティの学校で上映を行っています。

映画配達人の名前はビノッドさん。現地にお住まいのネパール人です。ここでは、ネパールでの上映の際の子どもたちの様子やこの活動に対する想いについてのビノッドさんへのインタビューをご紹介します。



孤児たちは、経済的条件から映画などの娯楽に触れる機会になかなか恵まれません、移民の子どもたちの両親はみな同じような決まった職業に就いているため、どうしても将来の選択肢は限られているように感じるでしょう。今後は、さらに遠く離れた地域にいる子どもたちにも映画を届けていきたいと考え、その準備をしているところです。私はWTPの活動を、ネパールのあらゆる場所で継続して実施する必要がありますがあると感じています。映画は、子どもたちに近代的な社会を見せ、彼らの想像力を育み、我々が教えようとしている人生において大切な「夢を持ち努力する」ことを伝え強いメッセージを残すのに、非常に優れたツールであると感じています。

この活動を始めたいと考えたきっかけは何ですか？

私はネパールで15年間、妻と一緒に子どもたちをアルコール依存や麻薬の危険から守るための教育普及活動に取り組んできました。近年は家庭環境に問題があるなど、社会的に弱い立場におかれた子どもたちに向けた道徳教育にも力を入れています。そんななか、WTPの移動映画館の活動を知りました。

エンターテインメントの力で子どもたちを楽しませるだけでなく、様々なメッセージを伝え夢を持つ力を育むことができるこの活動を、ぜひネパールでも広めていきたいと思ったんです。WTPも我々も、子どもたちのより良い未来のために活動しているという点で、志を同じくしていることが決めた手となりました。

Nepal
ネパール



DigiCon6 ASIAとコラボ!

アジアの13の国・地域が参加し、2018年度に20回目を迎えた短編映像コンテスト「DigiCon6 ASIA」を主催するTBSさまより、優秀作品を無償で貸与いただきました。アジアの優れた若手クリエイターを応援することを目的として発足したDigiCon6 ASIA。アジアの若手クリエイターのみならずが応募するコンテストですが、自らの作品が同じアジアの子どもたちに楽しみを提供し役立つとあって、このコラボにはクリエイターさまたちからも快諾いただきました。言語がなく吹き替え不要な6作品をご提供いただき、カンボジア、ネパール、ドミニカ共和国、ガーナ、バングラデシュの子どもたちに楽しんで観ていただくことができました。

Dominica

ドミニカ共和国

2018年7月、グアイマテの近くにあるバテイ（貧困集落）で子どもたちを対象にキャンプが行われました。バテイ出身の若者が立ち上げた180 Bradosという団体が毎年行っている催しです。7月20日、このキャンプのプログラムとして映画上映会を行いました。バテイには電気が通っていないが、180 Bradosの協力のおかげで発電機が使え、夜、星が見えるなかで7作品を上映。普段は元氣いっぱい走り回っている子どもたちが、目をまっすぐスクリーンに向けている様子が印象的でした。

上映作品のなかに、『ゆめみるシロ』という絵の具を主人公にした内容のものがあつたので、次の日、子どもたちと小麦粘土で色を混ぜて遊びました。何色と何色を混ぜたらどんな色ができるのか、子どもたちは不思議そうに見ていました。自分で色を混ぜてみたり、全部の色を重ねてマールブル色を出してみたり…。それぞれの作品を作っているときの子どもたちの目は、とても真剣でキラキラしていました。

映画配達人 上林萌袖 (かみばやし・もゆう) さん

1990年生まれ。慶應義塾大学卒業後、映像機器メーカーで働きながら、2015年より広報担当としてWTPに参加。2017年7月より青年海外協力隊のマーケティング職として、2年間ドミニカ共和国で活動。主にバテイなどの地域活性化を目指す団体に所属し、サトウキビに焦点をあてたエコツアーのマーケティングに携わる。



上映実績：2018年7月20日 キャンプで上映会
上映場所：ドミニカ共和国東部グアイマテという小さな町の近くにあるバテイ
上映作品：『映画の妖精 フィルとムー』、DigiCon6 ASIAより提供いただいた6作品



バテイとは？

カリブ海に浮かぶドミニカ共和国。毎年海沿いを中心に観光客で賑わうリゾート地として有名です。一方、大都市から郊外へ向かうと、貧困帯が住む村々があり、経済格差が顕著に現れている現実があります。特に広大なサトウキビのプランテーションに点在する集落はバテイと総称され、その状況はなかでも最も深刻とされています。植民地時代、ドミニカ共和国にサトウキビのプランテーションがもたらされました。1930年代以降、ドミニカ政府は、このサトウキビを使って砂糖産業に注力しようと考え、隣国ハイチから低賃金での出稼ぎ労働者の受け入れを事業として開始。その後、プランテーション内に強制的もしくは自発的に定住した、主にハイチ人の集落がバテイです。グアイマテなどの東部地域の他に、北部や南西部にもバテイはあり、ドミニカ人が暮らしている地域もあります。このバテイで働く人々の賃金は低く、ドミニカ共和国の貧困帯のなかでも最も深刻とされており、環境は劣悪です。ハイチ人に対する人種差別も残っており、難しい社会問題になっています。



マダガスカルでは、元青年海外協力隊の郡山文さんが現地の若者たちと立ち上げたZOVA an KIDSをまと携し、移動映画館を展開いただきます。郡山さんご自身が綴る立ち上げ当初のエピソードや今後への想いをご覧ください。

「私にできることは『マダガスカル人自身が現地のために行動を起こす』お手伝いだ」

任期のなかでそんな思いが強まり、現地の若者たちとZOVA an KIDSを創設しました。最初は人集めに苦労し、思うように進みませんでした。少しずつ集まったメンバーと対話を重ね、移動映画館というアイデアにたどり着き、簡単なマダガスカル語への吹き替え作業を経て実現しました。

その舞台裏には多くのサポーターがいました。現在は俳優の斎藤工さんから寄贈いただいた充電式プロジェクトで上映を行っています。当初は電気がない村での活動には発電機が不可欠。街でレンタルする費用は団体にはありません。そんな状況を救ってくれたのが、とある村で唯一発電機を持っていた、小さな学校の生徒のお父さんでした。なげなしの謝金と最低限のガ

ソリン代だけでも、そのお父さんは力になってくれたのです。

村の奥地に住むお父さんはいつも、手作りの木製台車に発電機を乗せて、裸足で待ち合わせ場所まで来てくれます。雨季には土の道がぬかるみ行く手を阻みます。携帯電話を持っていないお父さんとは緊急のやりとりはできず、約束の時間になっても現れないことにもやきもきすることも。けれど、遅刻はあつても必ず発電機を持って現れ、私たちの活動を実現させてくれました。帰りの車のなかで「次の上映会はいつだ？」と聞いてくれるお父さんの優しい笑顔。このような優しさの上に移動映画館は成り立っていたのです。

数えきれないサポートにより運営を続けてこられた団体ですが、WTPさまと正式に提携することとなり、私の帰国後も継続して活動することができています。メンバーはみんな、国の発展のために自らができることは何か、日々頭を悩ませながら活動を繰り広げている素晴らしい若者たちです。そんな彼らを、日本に帰国後も少しばかりでもお手伝いできることが、今の私の何よりの幸せです。これからもマダガスカルの子どものために、彼らと一緒に前進していきたいと思

映画配達人 郡山文 (こおりやま・ふみ) さん

大学卒業後、約4年間勤務した日本企業を離れ、青年海外協力隊として2016年1月から2年間、アフリカの島国マダガスカルに赴任。公立の小・中学校にて主に保健体育教育の質向上を目指し活動。任期中に現地の若者たちとZOVA an KIDSを立ち上げ、移動映画館など、子どもたちの情操教育に関する活動を行う。マダガスカルの方言で、ZOVAは太陽、ANKIZYは子どもを意味する。



ZOVA an KIDSメンバーのJacobさんからのメッセージ

ZOVAの一員でいることは、「変化を起こすために自分には何ができるか」に挑戦することです。待つのではなく、その機会を生み出し協力することの大切さを教わりました。太陽が私たちに生きる力を与えるように、私たちが周りの人々に明かりを届けることができます。私にとって移動映画館の取り組みは、「私たちはみんな、人生の主人公である」と気付かせてくれるものです。

上映実績：3回
上映場所：Marosakoa小学校
Ampazony小学校
Victoire Rasoamanarivo小学校
参加人数：合計293人

Madagascar

マダガスカル

Study Tour

スタディツアー事業

スタディツアーとは、観光を目的としたツアーと違い、「学習を目的としたツアー」です。近年、多くの旅行会社が現地でのネットワークを生かし、NPO・NGOの活動に参加するツアーやビジネス向けの工場視察ができるツアー、学術的なテーマに特化したツアーなど、様々なツアーを実施されています。数あるツアーのなかでも、途上国で映画を届けるツアーは他に類がなく、WTPのスタディツアーは弊社団体ならではの体験を提供しています。

私たちのビジョンは「生まれ育った環境に関係なく、子どもたちが夢を持ち、人生を切り拓ける世界をつくる」です。物資に恵まれた日本で生まれ育った私たちだからこそ、気付けないことがたくさんあると思います。私たちのスタディツアーでは、日本では考えもしなかったことに思いをめぐらせて、参加者の人生を豊かにしてくれるものを一つでも多く持ち帰っていただくことを目指しています。

日本で生まれ育った私たちだからこそ、
気付けないことがたくさんある。
それを伝えられるツアーとなりますように。

2018年度はスタディツアーのコンテンツに改良を加え、2019年2月にモニターツアーを実施しました。参加者からは大変ご好評いただきました。加えて、2019年GW（ゴールデンウィーク）により良いツアーを実施するための準備が整いました。2019年度もすでにツアーの参加募集が開始されており（一部実施済み）、GWはおかげさまで満員での実施となりました。夏季ツアーも、すでにご予約やお問い合わせを多数いただいています。
（2019年4月現在）

ツアーの内容

カンボジアの観光、村の暮らし体験、学校の子どもたちとの交流、映画上映体験など、スタディツアーならではの様々な体験ができる内容になっています。

2018年度より、渡航前の事前勉強（歴史・社会・経済）に重きを置いて改善に取り組み、参加者の方々に事前にカンボジアやWTPについて理解を深めていただけるようになりました。上映後のワークショップについても、上映作品の内容に関連させるのはもちろんのこと、事前勉強の内容

も生かしたテーマで設計しました。

音楽のワークショップ

・音楽を学ぶ意味ってなんだろう？スタディツアーのコンテンツの一つとして、音楽のワークショップを実施しました。実はカンボジアでは、ポル・ポト政権時代の虐殺の影響で、子どもたちの数に対して教師の数が十分ではありません。そのため、学校は午前と午後の二部制となっており、子どもたちはどちらかみの出席となるため、受けられる授業数が少なく、音楽や体育の授業がありません。また、仮に時間を取れたとしても教えられる人材がほとんどいないそうです。そんな子どもたちに、音楽の映画を観せ、音楽に触れる機会を提供しよう。そう考えた矢先、「そもそも私たちはなぜ子どもに音楽を学ぶ必要があるのだろうか」という疑問にぶつかりました。

文部科学省が作成している小学校の学習指導要領によると、音楽の授業を通して、「豊かな情操と美しさを追求する姿勢を育む」ことができるそうです。情操とは、「道徳的・芸術的・宗教的など）社会的価値をもつ



てサポート役をやっていました。会話があり、かつ他人のために何かできる仕事はないか：将来について漠然と考えていたことが強い決心へと変わっていき、将来のことをより具体的に考えることができるようになりました。

気付けばあつという間に最終日で、ツアーを共にしたメンバーともお別れ。帰国後に、「すごく良い体験ができた！」なんて余韻に浸りながらこの先どうするか考え始めたとき、「WTPさんの活動に本格的に関わりたい」「様々な国で、映画を知らない子どもたちに映画を届けたい」と感じ、すぐにメンバーの方に連絡を取らせていただきました。

今はまだWTP Youth (World Theater Project)の学生組織)の関東支部に入っただけの活動に全力で挑み、行けるツアーにはどんどん参加して、映画配達



た感情で、複雑なもの」とデジタル大辞泉（小学館）に記載されています。つまり、音楽を通して、人間にとって価値あるもの、美しいものに気付けるようになり、美しさに感動し、美しさを求める心を育むのが音楽教育の目的なのだと思います。美しさを追求する姿勢は、夢に向かって頑張る姿勢になりうるだろう：そのように考えて音楽のワークショップの実施を決めました。



に、子どもたちの将来を広げる希望ある活動に、より深く関わってきたいです。今の自分の大きな目標は、まずはWTP Youthで努力して、将来的には現地駐在で活動することです！そのためにも、今自分にできることを全力で！楽しみながら！経験を積んでいきたいと思っています。

2018年度のふりかえり 2019年度の目標

2018年度は、参加者のみなさんに事前にWTPの活動やカンボジアについて知っていただくことに力を入れました。参加者のみなさんにとってより気付きの多いツアーにするためです。100枚を超える事前勉強会のスライドの一枚一枚を、講師役のメンバー自身の渡航経験も交えて丁寧に作成。歴史・経済的な背景から活動の意義を説明し、事前に複雑な歴史事情を知っていただくことで、現地での多くのことに想いをめぐらせていただけるようにしました。準備には長い期間を要しましたが、モニターツアーではご好評いただくことができました。2019年度は、長い間準備をしてきたツアーへ多くの方に参加いただ

参加者の声

〈鹿江優斗さん18歳〉

・参加動機
他人との接し方が分からず、人間関係がうまくいかないなどの理由で高校を中退してから、ただひたすらバイトと遊ぶ日々を送っていました。そんな自分に、知り合いの人から「面白い活動があるよ、きつと良い経験になる」と勧めていただいたのがこのスタディツアーを知ることでした。そのころ、ちよと自分は海外に対して興味があり始めていたので、すぐにツアーへの参加を決めました。

・活動に対する感想

現地のスタッフさんや通訳の方々、学校の先生に協力していただき、映画や音楽などこの活動で届けようとしたものを無事に届けることができました。そのときの子どもたちの無邪気で明るい笑顔や笑い声は、今まで見たこともないようなとても素晴らしいものでした。自分自身をも、嬉しく楽しい気分にしてくれました。今回上映した3本の映画がすべて子どもたちに大うけで本当によかったです！子どもたちは映像のなかで次々と起きる出来事をしっかり理解していて、未知のもの

きたいと思っています。今年は、これまで成し得なかった年3回のツアーを実施する予定です。また、ツアーの質においても引き続きこだわっていき、気付きを得ていただくことに留まらず、参加者のみなさんが何か新しいことに挑戦するきっかけや、今までの価値観への変化をもたらすことができるようなツアーにしていきたいと思っています。



・感じたことや変化
スタディツアーに参加したことで、自分自身の心境に非常に大きな変化を得られたと思っています。ツアーに参加する前の自分は、この先何がしたいのか、何ができるのか、正直何も分からない、そんな人間でした。しかし、実際にツアーに参加して子どもたちと触れ合い、カンボジアを、この活動を肌で感じたことで、何か見えた気がしました。



自分が小さいころからとにかく話すことが好きで、他人のために何かしたいと思っていました。部活でも率先し

た

	2016年GW	2016年夏季	2017年春季	2017年夏季	2019年春季
旅行会社	HIS	HIS	PEACE IN TOUR	PEACE IN TOUR	PEACE IN TOUR
参加人数	10名	4名	9名	14名	4名

	2019年GW	2019年夏季I	2019年夏季II
旅行会社	PEACE IN TOUR	PEACE IN TOUR	PEACE IN TOUR
期間	4月28日～5月3日	8月13日～8月18日	9月7日～9月12日

Event

イベント事業

先進国の人々から途上国の子どもたちに
映画が届くモデルを目指して

WTPでは、「先進国の人
がイベントを楽しんだら、途
上国の子どもたちに映画が届
く」仕組みを目指し、国内で
様々なイベントを開催してい
ます。イベントの収益は途上国
の子どもたちに映画を届ける
ための活動資金として活用さ
せていただいています。

これまでに、映画の上映会や、
映画ファンの方々にお集まりい
ただくイベント、カンボジアを
はじめとした途上国について考
えるイベント、私たちの活動
を伝える報告会など、様々な
ジャンルのイベントを開催し、
たくさんの方々にご参加いた
だいています。今後も定期的に
開催してまいりますので、ぜ
ひご参加ください。

丸の内映画ナイト

Marunouchi Cinema Night



2018年11月13日、東京駅から徒歩2分、大手町駅直結の丸の内北口ビルディング17階にある、光技術のメーカー・ウシオ電機株式会社さまのオフィスをお借りして、『ハッピー・リトル・アイランドー長寿で豊かなギリシャの島でー』（ユナイテッド・ピープル配給）の上映会を実施しました。

司会は、WTPをギフトシネマ会員としても応援してくださっている秦野優子さん。参加者のみなさまにお配りした映画にぴったりのドリンクは、東京キリンビバレッジサイブス株式会社さまよりご提供いただきました。

上映後には、島根県の離島にある海士町に親子島留学をされている英治出版株式会社社長の原田英治さまをお招きし、映画のテーマにちなんだ島暮らしについてのトークショーも開催しました。

ウシオ電機さまのオフィスでの上映会は、その後「丸の内映画ナイト」と題したシリーズとして隔月で開催しています。毎回、会社帰りの社人の方をはじめ、多くの方にご参加いただいています。12月は、『メリエスの素晴らしき映画魔術』（エスパース・サロウ／新日本映画社配



映画の力で世界を変える。映画で途上国を知ると、途上国の子どもたちに映画が届く仕組みを目指し、ユナイテッドピープル株式会社さまとの提携を開始

「人と人をつなぐ世界の課題解決をする」ことをミッションに、社会課題解決のための事業を展開し、『ザ・トゥルー・コスト』や『コスタリカの奇跡』、『ソニータ』など社会課題を扱う映画を多く配給されているユナイテッドピープル株式会社さまと、2018年7月より提携を開始しました。提携内容は『タシちゃん和僧侶』、『ハッピー・リトル・アイランドー長寿で豊かなギリシャの島でー』『バレンタインー揆』『ザ・デー・アフター・ピース』の4作品をお借りして上映会を実施するというもの。上映会にご参加いただいたみなさまからの参加費による利益がWTPの活動費となり、途上国の子どもたちに映画が届くという仕組みです。2018年度は、東京と関西で計6回の映画上映会を開催しました。

Filmeet

Filmeet (フィルミート) とは、Film + Meetを意味し、新しい映画や、映画を通して人・場所・食・価値観に出会えるプラットフォームです。日本国内で映画に関連するイベントを定期的に開催し、そこで生まれた利益を映画配達事業にあてています。2015年度から活動を開始して、2019年度で5年目を迎えます。「先進国の人たちが映画を観たら、途上国の子どもたちも映画を観ることができる」、そんな仕組みを目指しています。

2018年度実績：イベント開催9回（関東・関西・北陸 合計）

映画のごはんを作って、食べよう! Vol.3

キューバサンド from 映画『シェフ ミツ星フードトラック始めました』

2018年10月14日、季節は秋、葉が色づく季節、食欲の秋！ そんな季節に、関西支部では恒例の映画メイイベントを開催（※映画メイイベントに登場するごはん）。今回の料理は、映画『シェフ ミツ星フードトラック始めました』から「キューバサンド」。この映画は、有名フレンチレストランで働く主人公が、オーナーとの対立からレストランを辞め、自分が本当に作りたい料理を作るため、移動販売事業を始める物語。今回用意したのは、WTPオリジナルレシピ。プロの料理人の方に



イベント紹介①
関西支部

らのごはんは、オレンジやハーブの匂いが漂う特製ソースに何日も漬けた豚肉。特製ソースを煮立たせ、味を調え、キューバサンド用のソースに、豚肉、チーズ、ピクルスをバゲットに挟み、バターをたっぷり塗ったフライパンで香ばしく焼く。その匂いで参加者同士楽しくお喋りしながら、料理の完成を待っていました。最後は、参加者みんなで一緒にいただきます！ 映画の世界に浸りながら、映画トークに花を咲かす一日となりました。



石川0円キッチン

2018年8月に開催されたクッキングイベント『石川0円キッチン』。2015年に公開された映画『0円キッチン』を再現。石川県で発生する規格外野菜や廃棄野菜を利用し、参加者がその場でメニューを考えるアドリブクッキング。この日は、ニンジン、玉ねぎ、ねぎ、かぼちゃなど数種類の規格外野菜が市場から届きました。数グループに分かれた参加者が完成させた料理は、実に8品！ 石川県でも発生する食料廃棄問題への関心を高めつつ、おいしい料理に舌鼓を打つ、そんな特別な一日となりました。



イベント紹介②
北陸支部

企業とのコラボイベント
ジャパンシステム×WTP

2018年8月18日、渋谷区代々木にあるジャパンシステム株式会社さまの社内イベント『ファミリーデー』に参加させていただきました。

ジャパンシステムさまは、セキュリティ事業・エンタープライズ向け事業・公共向け事業の三つの事業を長きにわたって展開されている会社です。

そんなジャパンシステムさまのお声がけにより、コラボイベントが実現しました。

今回は、「お父さんやお母さんが働いている職場に子どもたちを呼ぼう！」と社員のみなさまが自発的に企画された『ファミリーデー』イベントで、子どもたちが楽しめるコンテンツが盛りだくさんでした。

そのなかでも、WTPは二つの企画を担当させていただきました。

- ① 映画上映
『映画の妖精 フィルとムー』
& 制作メイキング映像
- ② ワークショップ
「マジックロールを作ろう」
講師 伊藤裕美さん
(アニメーター・ドラーニングらぼ)

World Theater Project で活動するメンバーに聞いてみた！
私が移動映画館を行う団体でボランティアをする理由

WTPでは、業種・職種を問わない様々な分野で働く20名ほどの社会人メンバーが、プロボノ・ボランティアとして関東、関西、北陸にて活動しています。それぞれがWTPに参画した理由は様々ですが、みなさまからいただいたあたたかいご支援を途上国の子どもたちに「移動映画館」として届けるため、日々それぞれの得意分野を生かしながら活動しています。今回は、その裏側をご紹介しますべく、活動への参画理由や、仕事とWTPとのつながりなどについてメンバーに聞いてみました！



映画界で活躍するメンバー
映画監督/映像ディレクター
内田英恵(うちだ・はなえ)



Q WTPの活動に参加したきっかけは？

A 2014年に初めての長編作品が完成した際、取材をしてくださったネットメディアがあったのですが、同じメディアのなかでWTP(当時はCATIC:カンボジアに映画館をつくらう)の活動が紹介されていたのが、この活動を知った最初だったように思います。その後何かのときにボランティアスタッフを募集しているのを知り、応募させていただきました。

Q WTPでの活動と仕事のつながりを感じるエピソードを教えてください！

A 活動の記録としてや、ご支援者のみなさまへ活動内容のご報告をするための映像制作というところを主に担当させていただいています。そうしたことで現地の子どもたちとご支援者の方々の距離を縮めることができれば嬉しく思います。また活動実施地の子どもたちにとって、「映画を観ること」

にプラスして「映画を撮ること」も大きな経験、新しい発見のきっかけになるという思いから、子どもたち自身が「映画を撮る」という体験学習の実施を試みます。

Q 今後、WTPでどのような活動をしていきたいか教えてください！

A 映画の力を信じている一人として、より良い、質が高く、面白くてエキサイティングな作品を、より多くの子どもたちが楽しく観られるように、これからも活動の工夫や改善に携わっていかたいと思っています。映画から生まれる子どもたちの自発的な議論や、子どもたち自身が生み出す映像作品を、ぜひ近い将来目に見えたら、とも思います。

映画監督/映像ディレクター。代表作に『動かない体で生きる私の、それでも幸せな日常』、『あした生きるという旅』、『子ども哲学-アークコードのじかん-』、シリーズ『世界は不思議～布のおはなし～』など。1981年東京生まれ。日本とアメリカで映像制作を学び、帰国後映画制作会社勤務を経て独立。2015年よりWTPに参画。作品作りや出会いを通じて、生きることは絶対にひとりの旅ではない、ということを感じ、映像が様々な状況にある人たちの孤立を防ぐ力、外の世界への窓になればという思いで取り組んでいる。



マジックロールはアニメの原点でもあるもので、2枚の紙に異なる絵を描いて鉛筆などで丸めて擦ることで、小さい子どもたちでも簡易アニメーションを作成できるワークショップです。子どもたちの愛くるしい笑顔にたくさん触れることができ、参加したWTPスタッフも心が温まりました。またこの笑顔に触られる日が来ますように。

ジャパンシステムさま、貴重な機会をいただき誠にありがとうございます！



東京女学館中学校×WTP

2019年2月2日、東京女学館中学校の生徒さま6名に、社会貢献学習授業の一環としてWTP主催イベント「途上国×映画」〜アジア・アフリカの映画事情の今〜へご参加いただきました。

WTPの「映画を途上国の子どもたちに届ける」という活動について、「どうして映画なのか?」「電気が通っていない地域での上映方法は?」「私たちにできることは?」などの質問にお答えしました。

WTPの活動について知っていたいたあとは、実際にイベント準備のお手伝いやワークショップへの参加をしていただきました。これらを通じて、より深くWTPのことを知っていたのだのではと思います。

イベントの後日、実際に社会貢献学習授業を見学させていただきました。生徒さまによるWTPについての発表を拝見させていただきました。

発表資料には【世界の子どもたちに笑顔(えいご)を!】というタイトルの一文。

・ワールドシアタープロジェクトとは



・映画上映のための権利
・あの人から教えてもらった貧困地域
・バンングラデシユの歩き方
・映画で世界をつなぐ
・私たちにできること
などの各項目が中学生のみなさまの視点でまとめられ、それぞれ思い思いの発表が行われていました。

WTPの活動が中学生のみなさまに届いている様子から、幅広い世代にWTPが広まることを感じ、嬉しく思いました。

東京女学館中学校のみなさま、またいつでも遊びに来てください！

上映状況

カンボジア、バングラデシュ、ネパール、マダガスカル、ドミニカ共和国、タンザニアなど、クレイアニメ『映画の妖精 フィルとムー』は様々な国で上映されました。希望する方はどなたでも無料でこの作品を上映することが可能です。

上映をご希望の方はWTPのHPからお問い合わせください。

映画祭

『映画の妖精 フィルとムー』は、そのクオリティの高さから国内外において高い評価を受け、世界中の様々な映画祭で上映されています。

グッドデザイン賞

世界中どこでも届けることができる、権利フリー・言語フリーのクレイアニメ映画『映画の妖精 フィルとムー』を制作し、またフィルとムーのグッズ販売による収益を途上国の子どもたちに映画を届けるための活動資金とする仕組みが評価され、2018年度のグッドデザイン賞を受賞しました。グッドデザイン賞審査委員さまからは、次のような評価コメントをいただきました。「映画が無料だからこそ、世界各地で上映され、キャラクターの人气が高まり、グッズの売り上げが増え、活動資金が生まれる。映画を観られない環境に暮らす子どもたちに映画を届ける、という支援活動を、持続可能な仕組みにしている点を評価した」

グッズ

2018年度は新たに、トートバッグ、パーカー、マグカップ、チャームなど様々な商品の販売を開始しました。興味をお持ちの方はインターネットで「フィルとムーのオンラインショップ」と検索してください。

今後も途上国の子どもたちの可能性を広げるために、『映画の妖精 フィルとムー』を様々な国で上映していきたいと考えています。また国内においては、知名度向上のためにイベントやグッズ販売、様々な企業とのコラボを行っていく予定です。今後ともあたたかく見守っていただけますと幸いです。



FILL and Moo

フィルとムーは、映画の妖精。フィルムの帽子をかぶった黄色い子がフィル。

何にでも変身できる夢の種がモチーフの赤い子がムーです。

二人は世界中の子どもたちに映画を届けるために生まれました。

世界中の子どもたちのために移動映画館を行うWTPのマスコットキャラクターであり、

理念の象徴です。有名キャラクター「ウサビッチ」を生み出した

有限会社カナバングラフィックスの宮崎あぐりさまが描いてくださいました。



フィル FILL



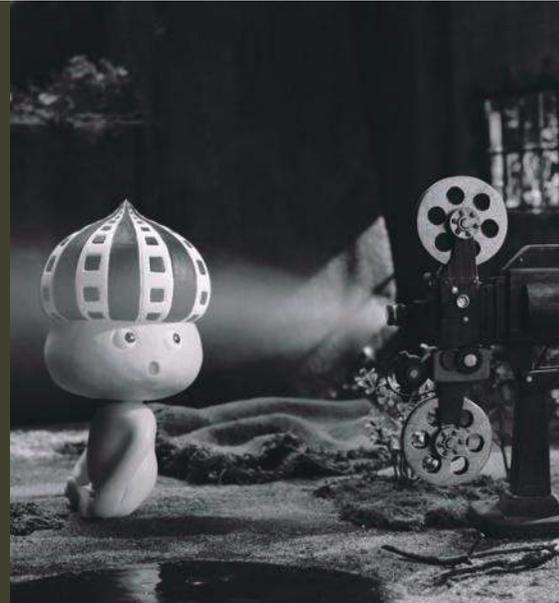
Moo ムー

フィルム柄の帽子をかぶった映画の妖精。好きな食べ物はポップコーン。帽子から映像を映し出せる能力がある。フィル語を喋る。その姿は子どもにしか見ることができない。

何にでも変身できる夢の種。映画をこよなく愛している。誰かを喜ばせることが好き。テケテケ走る。ムー語で話す。たいていフィルと一緒にいる。その姿を大人は見ることができない。

撮影：高橋弘
照明：石金真人
造形：宮島由布子、池田恵二、三谷瞳、村田珠美
造形/アニメート/デジタルワークス：阿部靖子
造形/デジタルワークス：面高さやか
造形/アニメート：近藤翔
デジタルワークス：森下裕介、中村匠吾、山田優子、そんよんそん
2Dワークス：佐藤美代、撮影用特機：川村徹雄
タイトルデザイン：武藤弘明
ビデオコンテ協力：こがやっただけ
撮影スタジオ：ヒロアニメーションスタンド
ポストプロダクションスタジオ：Tripod Ltd, Liability Co.
制作：アングル合同会社
協力：WOWOW「映画工房」、cinéma bird
製作：NPO法人 World Theater Project

声の出演：斎藤工、板谷由夏
監督/脚本/編集：秦俊子
企画/ストーリー原案/脚本：齊藤工
企画/脚本/プロデューサー：教来石小織
プロデューサー：遠藤裕
アシスタントプロデューサー：横山日登美
制作プロデューサー：高橋悠平
キャラクターデザイン：宮崎あぐり
音楽：根木マリサ
音響：滝野ますみ
ミキサー：宇津木鉦一
MA技師：曾田玲衣奈
レコーディングエンジニア：沼田彰彦、齋藤愛子
撮影/照明/カラリスト：手嶋悠真
撮影/照明：山本大輔



クレイアニメ

『映画の妖精 フィルとムー』

上映時間：8分
公開：2017年10月（日本）
言語：なし



英治出版オンラインで連載を執筆しました

2018年10月より、代表教来石が英治出版オンラインにて、WTPの活動に関する連載「映画で貧困は救えるか」を執筆させていただきました。この連載では「映画で貧困は救えるか」を二つの象徴的な問いとして、教来石が活動を続けるなかで感じる様々な葛藤や可能性と向き合うことをテーマとして綴っています。今回は、その連載のなから、一つの記事をご紹介させていただきます。



西日本豪雨に思うーNPO 代表の私が無力を感じる瞬間と、支えにしている言葉。

活動に自信がなくなるとき

この世で一番美しいものは、映画を観る子どもたちの顔なんじゃないかと、実は本気で思っている。

途上国の子どもたちへの移動映画館の活動が好きだ。可能性にあふれる、目のキラキラし

ご連絡をいただいた。「被災地の子どもたちに映画やエンターテイメントを贈れないか」という内容だった。

現地で被害に遭った方たちのなかには、目をつぶれば災害の様子が蘇る方もいる。水害の音が耳から離れないトラウマを抱えている子もいる。そんな現地の方たちから、エンタメを求める声があった。災害の影響で海水浴にも行けず、子どもたちは時間があるけれども、娯楽がないのだという。

映画やエンタメが多少なりとも、その地に楽しい記憶を上塗りできるのでは。

「被災地の子どもたちに楽しい夏の思い出を贈りたい」という齋藤さんの想いのもとに各業界のプロフェッショナルが集まり、プロジェクトが動き出した。私もおこがましくも参加させていたことになることになった。

災害現場で「娯楽」はいつから必要になるか？

プロジェクトメンバーの方たちが岡山、広島と被災地を回られるところに、微力ながら私も同行させていただいた。現地に行くまでは不安だった。

良いプロジェクトだとは思いつつ、内心、被災地にエンタメを持って行くのは時期尚早ではないかと思っていた

た子どもたちと空間を共有し、笑った顔や真剣な顔、はしゃいで拍手する姿を見られることに幸せを感じる。時折、映画から新しい職業や生き方を知る子どもたち一人ひとりに夢の種が蒔かれているところを想像したりする。

私にとって、一生情熱を燃やし続けることができる活動はこれ以外にないのだと、最初にカンボジアで上映した7年前のあの日から今日までずっと思っている。私は自分には自信がないのだけれど、移動映画館の活動とビジョンと、仲間の素晴らしさには自信がある。

けれどその活動にさえ自信を持ってなくなる時がある。社会的に意味のない浅はかな活動なのではないかと悩み、無力感に苛まれるときがある。それはどんなときかとというと、大きな課題に立ち向かう活動をされていて人々や社会の可能性を具体的に切り拓いている方を見たときだ。

たとえば、ALS（筋萎縮性側索硬化症）患者の方が分身ロボットを操作して働けるカフェを開いた吉藤オリイさん。認知症の方たちが働ける「注文をまちがえる料理店」を生み出した小国士朗さん。路上生活者の支援を行い、貧困問題解決に向けて活動している大西連さん。

のだ。エンタメというものは衣食住、すべてが復興した最後に求められるものだと思う。だから。

瓦礫の撤去作業の合間に、映画を上映して、子どもたちとともにミニ・タンチャームづくりをし、コマ撮りアニメの製作体験を行った。子どもたちは真剣で、とても楽しそうだった。

子どもたちの様子を見て、なぜか泣きそうになった。娯楽の支援が被災地の役に立っている気がしたのだ。具体的に何かが劇的に変わったわけではなく、楽しい時間が共有されただけなのだけれど。

映画やエンタメは、衣食住が満たされて、すべての瓦礫が撤去された最後にやつと必要になるものではなく、復興の途中でも、現地に寄り添えるものなのではないかと感じた。

瓦礫はまだまだたくさんで、復興には時間がかかるだろう。長く復興活動が続くからこそ、長い時間を戦い抜くための娯楽は、必ずしも他の支援の「後」ではなく、「同時」に大切なものかもしれない。そんなことを思った。

後日、ビッグロブ株式会社が行った「災害に関する意識調査」で、「苦しい時こそ娯楽は必要、約9割」という記事を見た。救われた思いがした。被災地を訪れた約ひと月後、普段

ここに全員のお名前を挙げることはできないけれど、こういう偉大な方を見たときに、衝撃を受ける。そして心から尊敬する一方で、ついつい自分と比べてしまう。そして落ち込み、自信をなくす。

途上国の子どもたちに映画を上映することで、果たして困っている誰かが助かっているのだろうか？ 本当に社会に意義のある活動なのだろうか？ 「映画で夢の種蒔きを」なんて、すぐに結果の出ない、暖簾に腕押しのような活動に、方向性を見失いそうになったりもする。

しかしそれ以上に、私が一番落ち込み、何もかもに自信が持てなくなるときがもう一つある。それは、災害が起きたときだ。

西日本豪雨で苛まれた無力感

去年の夏もそうだった。西日本が地震や豪雨に見舞われたとき、ネットニュースやテレビで伝えられる悲惨な状況に目を覆いたくなった。

自分ではどうしようもできないことに、私は目を覆ってしまいがちなと思う。たとえば他国内戦の問題に真正面から向き合うことができない。両親を失い血にまみれた少年の写真を凝視することができない。ニュースを

私たちが移動映画館を展開しているカンボジアを訪れた。

上映で訪れた学校の先生に「話がある」と言われた。何だろうと思っていると、先生は手を合わせ、「日本が災害で大変なときでも、カンボジアを支援してくれてありがとう」と言ってくれました。そのときも救われた思いがした。

迷いが生まれたとき、私の支えになっている言葉

今回の件で、私たちの活動と災害との向き合い方に対して、一つの前向きな発見ができた。それでも、活動を続けていくなかで、これからもたくさん迷いと向き合っていくことになると思う。

迷いながら活動を続けていくなかで私の支えになっている話がある。敬愛するフォトジャーナリスト、安田菜津紀さんが講演で語っていたエピソードだ。

安田さんが取材を続けるのは、世界中の難民・貧困・災害の現場。自分は医療従事者のように直接目の前の人の命を救うことも、現地に根を張るNGOのように寄り添うこともできない。写真で直接的に人の命を救うことはできない。

聞くのが怖い。すべてと向き合ってしまったら、とてもじゃないが心がもたないのだ。

でも国内で起きている災害のニュースは、目をそらしたくてもあちこちから毎日のように情報が入ってくる。毎日無力感に苛まれ暗い顔になっていた。わずかばかりの寄付をしたところで、その無力感が消えることはなかった。こんなときに途上国で移動映画館の活動をしていることに罪悪感さえ覚え、団体のSNSの発信はやめて沈黙した。そんななか、俳優の齋藤工さんが、西日本豪雨のときに真っ先に現地に入ってボランティア活動を行っているニュースを見た。

俳優であり、映画監督であり、移動映画館cinema birdでも活動されている齋藤工さんのことを、勝手に同志だと思わせていただいている。移動映画館の活動を世界に大きく広げるときつかけもくださった、団体の大恩人でもある。

齋藤さんのボランティア活動を知り、あらためて尊敬すると同時に、やはり落ち込んだ。私は何も動けていない。体力がなくて能力のない私が行っても逆に現地に迷惑だろうと、心のなかで言い訳ばかりしていた。

それから数日経って、齋藤さんから

そう自問する安田さんに、現地のNGOスタッフの方がこんなことを言ってくれたという。

菜津紀さん、これは役割分担なんです(中略)自分たちNGOは、現場にとどまり、人に寄り添って活動し続けることができるかもしれない。けれどもここで何が起きているのかを、世界に発信することがときに難しい。あなたは少なくとも通い続けることはできるし、ここで何が起きているのかを伝えていけるんじゃないか

(『君とまた、あの場所へ シリア難民の明日』安田菜津紀著、新潮社より)

どうしたって、社会を良くするすべてに関わることはできない。すべてを救うことはできない。

それでも、どんなときも自分や活動を卑下することなく、胸を張って「私たちは私たちの役割を果たしています」と言えるようになりたいと思つた。

連載「映画で貧困は救えるか」

英治出版オンライン



(2019年1月29日掲載)

関西支部の活動足跡

- 2018.04 Filmeet イベント：関西たのしねま Vol.3 映画『ビッグ・シック ぼくたちの大なる目ざめ』
- 2018.05 Filmeet イベント：関西たのしねま Vol.4 映画『しあわせの絵の具 愛を描く人 モード・ルイス』
- 2018.06 活動報告会
- 2018.07 Filmeet イベント：関西たのしねま Vol.5 映画『万引き家族』
- 2018.09 Filmeet イベント：関西たのしねま Vol.6 映画『ワンダー 君は太陽』
- 2018.10 Filmeet イベント：映画のごはんを作って、食べよう！ Vol.3
キューバサウンド from 映画『シェフ ミツ星フードトラック始めました』
- 2018.11 映画上映会：チベットを五感で感じる休日～映画とお菓子とお茶とともに～ 映画『タシちゃん和僧侶』上映
- 2019.02 World Theater Project 関西 活動報告会 ～2年半の歩みとこれから～



2018年度のふりかえり

2018年度は、学生メンバーが副代表を務め、彼女を中心にイベントなどを開催する体制にし、社会人とは違う目線で、映画好きの方々が気軽にお越しただけのような工夫が生まれました。映画好きの方と一緒に映画を鑑賞する『関西たのしねま』には、何回も足を運んでいただく方も増えました。そして、映画イベントを行いながら、一定頻度で活動報告会も行い、私たちの活動をより詳しく説明できる機会を設けた結果、WTPの活動サポーターであるギフトシネマ会員になってくださる方も増えました。2018年度は関西支部にとって良い活動の流れを築けた一年だったと思います。

(関西支部代表 金原竜生)

2018年度はWTPの関西での動きが活発になるようにもがき続けた一年でした。新しいメンバーも増え、2019年度はさらに盛り上がる一年になると確信しています。引き続き温かく見守っていただけると幸いです。

(18年度副代表 葉師寺沙彩)

2019年度の目標

2018年度の活動もあり、関西支部は新たに3名のメンバーを迎えることになりました。一方、支部設立からの初期メンバー2名が卒業を迎え、新しい体制で活動をしていくこととなります。新たな関西支部でみなさんにこれまで以上に面白い映画イベントなどをお届けしたいと思います。

(関西支部代表 金原竜生)
(副代表 草原美咲)



2016年に発足したWTPの内初の支部で、関西地方(大阪府・京都府・兵庫県・滋賀県)を舞台に活動。団体紹介イベントや映画に関するイベント(Filmeet)を開催しています。

関西支部の特徴はなんといっても、少人数ながらもそのメンバーの多様性です。大学生から職種の異なる社会人まで、関西各地から様々な人が集まっています。WTPに参加した理由も、「映画がとにかく好きだから」「国際協力で興味があります!」「映画で途上国支援という新しい方法に惹かれた」など様々。そんなメンバーだからこそその多種多様なアイデアで、途上国の子どもたちに映画を届けるための活動しています。



MISSION

1. 関西地区でのWorld Theater Project ギフトシネマ会員数向上
2. 関西地区でのWorld Theater Project 知名度向上
3. 国内映画イベント事業『Filmeet』の実施
4. 関西地区での映画好き人口増加

Kansai
関西支部

2018年度活動実績

イベント開催数：18回／イベント累計参加人数：130人

メディア掲載回数：15回（北國新聞、北陸中日新聞、毎日新聞、読売新聞、金沢経済新聞、MRO北陸放送）



2018年度のふりかえり

2018年度は、北陸支部にとって飛躍の年でした。2017年度から始めた企画である、金沢市の中心街にある大正時代の古民家を改装したスペースにて毎月映画の上映をする『金澤町家シネマ』を定期的に開催することができ、リピーターの方も増えてきました。上映する作品は映画配給会社ユニテッドピープルさまの社会派映画で、金沢ではあまり上映されていないこともあり、映画好きの方や社会課題に関心のある方に多くお集まりいただきました。定期のイベントの他に、新イベント『石川0円キッチン』も行いました。これは、『0円キッチン』という映画をスピノフさせた企画で、石川県で発生する規格外野菜などを使い、参加者で料理を作るイベントです。そのコンセプトが評価され、多くのメディアに取り上げていただきました。それらのイベントで北陸支部の存在が石川県で広がり、他の団体とのイベント共同開催も実現できました。他にも、活動足跡にある通



り数多くの団体とのコラボが生まれ、お誘いいただいた田んぼアート企画からは、フィルとムーのおもてました。あらためて、地域におけるこの活動の可能性を感じ一年になりました。

2019年度の目標

これまで私たちのイベントにお越しいただけるのは、国際協力や映画に関心がある方々がほとんどでした。しかし2018年度は、他団体とのコラボによって、より幅広くお招きすることができました。映画にはたくさんの可能性が秘められていきます。必ずしも映画鑑賞だけでなく、映画をテーマに議論したり、映画のなかに登場する食事などの体験も、映画の世界により浸ることができると感じています。2019年度は「映画」をテーマに窓口を広げられるよう、従来のイベントに加え、新しい種類のイベントも開催できればと思います。そうすることで、より多くの方々に映画を違った観点で楽しめるような機会を提供できると思っています。北陸支部は、映画を地域活性にもつなげられると思っており、地域内の様々な世代の方が一緒にイベントに参加することで、その地域自体がもっと面白くなるような取り組みを目指します。

（北陸支部代表 金原竜生）



Hokuriku

北陸支部

2017年4月に設立し、金沢を中心に活動する支部。

支部代表：金原竜生

MISSION

1. 北陸地方でのWorld Theater Projectの知名度向上および活動の拡大
2. 映画を通じて、地域を盛り上げる

主な活動内容

1. 映画をテーマにしたイベント開催
2. 金澤町家シネマの開催



北陸支部の活動足跡

- 2018.04 金澤町家シネマ 映画『ソニータ』
- 2018.05 World Theater Project 北陸1周年記念イベント『映画の妖精 フィルとムー』上映&トークライブ『映画のチカラ』金澤町家シネマ 映画『もうひとりの息子』
- 2018.06 (再上映) 金澤町家シネマ 映画『0円キッチン』映画スピノフ企画：石川0円キッチン金澤町家シネマ（6月上映）映画『ヴィック・ムニーズ/ごみアートの奇跡』
- 2018.07 SDGsダイアログ第3回『誰も取り残さない』は誰のため？を考える』映画上映会※国連大学 サステイナビリティ高等研究所 いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットさまとの共同企画Vol.1 映画『みんなの学校』@珠洲市 / Vol.2 映画『バベルの学校』@金沢市
- 2018.08 COTO×COTO 夏祭り『石川0円キッチン』 出店Filmeet イベント：北陸版映画遠足 Vol.7 映画『カメラを止めるな!』のっぼくん - オーガニックとフェアトレードのお店 - 主催お子様にはじめての映画体験を！8分間のクレイアニメ「フィルとムー」 上映会金澤町家シネマ 映画『ハーブ』
- 2018.09 金澤町家シネマ 映画『台北カフェ・ストーリー』
- 2018.10 金澤町家シネマ 映画『ジェンダー・マリアージュ ～全米を揺るがした同性婚裁判～』共同企画「田んぼdeアート大作戦♪アートを刈り取ろう」写真展「映画のチカラが途上国にもたらすもの」@金沢大学（10月15日～11月12日の開催）
- 2018.11 石川0円キッチン with おにぎりアクション～おにぎり握って、世界を救えっ！～金澤町家シネマ 映画『リベリアの白い血』
- 2018.12 のっぼくん主催 Xmas親子ミニ映画会♪8分間のクレイアニメ「フィルとムー」 上映会
- 2019.01 高岡ロータリークラブさまでのゲストスピーカー講演「映画のチカラが途上国×地域にもたらすもの」
- 2019.03 認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやいさまとの共同企画貧困問題を「学ぶ・伝える」レクチャーセミナー 映画『わたしは、ダニエル・ブレイク』

WTP Youth

World Theater Project Youth

World Theater Project Youth (WTP Youth) は、学生が主体的に行動することにより、WTPの活動を国内外の学生へと広め、組織と個人の成長を目指す学生組織です。2017年6月に発足し、「映画が好き」「国際協力に関心がある」「子どもが好き」「組織の立ち上げに興味がある」など各々の動機のもと、多様な学生が参加し活躍しています。発足当時は数人しかいなかったメンバーも、徐々に人数が増え、関東圏のみならず全国に活動が広がっています。

全国分布：高校生東京支部（東京都）、大学生関東支部（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）、神戸大学支部（兵庫県）

MISSION：World Theater Projectの輪を広げる

VISION：若い力で途上国の子どもたちが当たり前前に映画を観られる時代を築く

イベント運営

映画という窓口から、途上国支援に関心が高くない方にもWTPの活動を発信し、収益が途上国の子どもたちに映画を届けるための寄付となるイベントを定期的開催しました。例えば昨夏には、チベットの料理と雰囲気を楽しむことができる東京・曙橋にあるレストラン「タシデレ」さまにご協力いただき、WTP Youthとして初開催となる、ユナイテッドピープルさま配給の映画『タシちゃん和僧侶』上映会を行いました。その上映会でWTPを初めて知っていただけただけ参加者も多く、WTP Youthとしてまた一歩前進することができました。

〈2018年度実績〉

- ・夢を持って生きるとは…?～春の映画上映会～/高校生東京支部
- ・TFT-UAとのコラボ企画 しょく（職、食）から見直す途上国/大学生関東支部
- ・東京のまんなかでチベットを旅しよう～チベットの映画とお茶とスイーツ～/大学生関東支部
- ・リトルハッピー・イン・スローナイト～ギリシャの島から学ぶしあわせの秘密～/大学生関東支部
- ・神戸大学六甲祭にて活動紹介/神戸大学支部
- ・『バレンタイン一揆』上映/高校生東京支部

ブース出展・ステージ登壇

外部団体主催のイベントにブースを出展し、ワークショップの実施やフィルとムーグズの販売を通してWTPの認知度向上に努めました。

〈2018年度実績〉

- ・カンボジアフェスティバル2018 /大学生関東支部
- ・神戸ソーシャルキャンパスさま主催 学生団体合同新歓/神戸大学支部
- ・株式会社 taiiki さま主催 BEYOND2.0 ブース出展 /神戸大学支部
- ・グローバルフェスタ JAPAN2018 /大学生関東支部
- ・神戸発掘映画祭 /神戸大学支部
- ・エシカルペイフォワードさま主催 世界こどもの日ユース・フェスティバル 誰も取り残さないファッションショー /大学生関東支部
- ・JASID-Jasnids さま主催 TSUNAGARU フェス /神戸大学支部

スタディツアー

2018年8月、WTP Youth 発足以来初となるメンバー向けスタディツアーを実施しました。WTP Youth 立ち上げ当初より、メンバーから「実際にカンボジアの小学校へ行って映画上映をしたい」との声があったことが企画の発端です。これを機に、毎年WTP Youth メンバーで途上国へ映画を届けに行くことができたらと考えています。

〈2018年度実績〉

日程：2018年8月22日～27日の4泊6日
参加者：WTP Youth メンバー 8名（大学生4名、高校生4名）+H.I.S. 添乗員山口さま

今回のツアーではワークショップに力を入れました。メンバーで話し合って『ハルのふえ』を上映することに決め、コップでリズムを取ってメロディを奏でる「カップソング」を行うことにしました。いざ子どもたちに教えてみると、カンボジアの小学校では音楽の授業がないせいか、リズムをなかなか上手く取れない子どもたちが大勢いて、音楽の授業の重要性を痛感しました。それでも諦めずに、身振り手振りで子どもたちにリズムを何とか伝えようと粘り、最終的にクラス全員で『さんぽ』を合奏することができました。



添乗員として同行してくださったH.I.S.スタディツアーデスク 山口翼さまより

現地の子どもたちが食い入るように画面を見つめ、笑ったり、拍手したり、リアクションを取る姿が人懐っこく非常に印象的でした。映画が持つ力は万国共通で、多くの子どもたちに夢を育む素地を与えてくれると思います。実際に、上映後、子どもたちははにかみながら自分の夢をみんなの前で披露してくれました。子どもたちに映画を通して夢を持ってもらうという団体のミッションに少しでも携われたことを大変嬉しく思います。これからも応援しています！

メンバーの声



浅沼日向（高校生東京支部）

Q WTP Youthへの参加動機は？

A ボランティアに興味があり、高校生でも何か社会貢献ができるチャンスはないか探していました。そんなときに、WTP Youthに所属している高校の先輩から紹介してもらいました。私は小さいころから映画が大好きでした。だからこの活動を通して、途上国の映画を観られない子どもたちに映画を観てほしい！と思い参加しました。

Q 2018年を振り返ってください。

A グローバルフェスタの出展や映画上映会などに意欲的に関わられ、大きく成長できたと思います。一番の思い出は夏のスタディツアーに参加して初めてカンボジアに行ったことです。小学校で映画上映を体験できたのはもちろん、生まれて初めて東南アジアへ行ったので学びも多く、とても思い出に残る経験ができました。

Q WTP Youthでの学びを今後どう生かしたいですか？

A ツアー参加により、今までの日本での活動がどう現地の子どもたちに影



森田理央（神戸大学支部）

Q WTP Youthへの参加動機は？

A 幼いころから映画が大好きで、何か途上国の人々の役に立ちたいという思いも常に抱いてきました。そんななか大学生関東支部で活動する友人からWTPのことを知り、途上国の子どもたちに映画を届けることで「夢の種をまく」というこの活動に感銘を受け、魅力を感じ、私もメンバーとして活動を始めることを決意しました。

Q この一年を振り返ってください。

A 神戸大学支部の活動をより多くの方に伝えようと奔走した一年でした。神戸市にあるパルシネマさまには、団体紹介チラシや代表の著書『ゆめの画を覗に訪れる多くの方々』に知っていただけました。メンバー一丸となって取り組んだ学祭「六甲祭」では、教室の装飾や看板の製作まですべて自分たちで行い、フィルとムーをモチーフにしたネームプレートや募金箱も作りま

した。多くの来場者に私たちの活動を伝えられる機会になったと思います。1月には新メンバーを迎え、新たな目標を胸にみんなで活動しています。

Q 2019年度、神戸大学支部リーダー就任の抱負は？

A 新たな挑戦の年にしたいです。他の団体と協力しながら、カンボジアの子どもたちだけでなく、神戸を中心とした関西圏に住む映画を観る機会の少ない子どもたちにも、映画体験から夢や希望を抱いてもらえるような企画を実施したいです。

2018年度のふりかえり

WTP Youth 立ち上げから2年目を迎え、イベント回数が飛躍的に増えました。また、WTP Youth 全体としての活動よりも、三つの支部ごとに活動することが多くなった一年でした。各支部が自立した組織になり、WTP Youth 全体の活性化を図れました。この流れに乗り、引き続き各拠点でWTPの輪を広げ、学生の力で少しでも途上国の子どもたちに映画を届けることができたらと思います。

初のWTP Youth メンバー向けスタディツアーを実施できたことも大きな

成果でした。実際に現地で映画を届けた経験のあるメンバーが増えたことは、団体の大きな成長につながっていると実感します。また、メンバーがデザインした「WTP Youth ポロシャツ」も作成し、メンバーの一体感を増すことができたと思います。



行動指針

1. Self-Starter：人から言われてやるのではなく、自分の考えをもって行動する。
2. Challenger：自分に経験のないことでも勇気を持ってチャレンジする。
3. Appreciation：常におごることなく、謙虚で感謝を忘れない。



World Theater Project で活動するメンバーに聞いてみた！／

私が移動映画館を行う団体にボランティアをする理由

国際協力・途上国支援で活躍しているメンバー

シンクタンク研究員/ソーシャルワーカー
近藤碧(こんどう・みどり)



Q WTPの活動に参加したきっかけは？
A 開発援助の仕事でカンボジアに滞在していたとき、映画が恋しくなり、カンボジアの映画館に行くうと思いつきました。インターネットで「カンボジア映画」で検索したところ、WTPの教養石代表の記事に出会い、コンタクトを取ったのがきっかけです。映画を観ながら育ってきた私にとって、映画はまさに「世界への窓」でした。他方、途上国に行くと、映画だ

けでなく芸術文化にアクセスできない人がいかに多いかを知り、学校教育では届かない、心の豊かさや情緒を育む芸術の力に関心を持つようになりました。ぼんやりと「途上国×映画×子ども」というテーマに興味を抱いていたなか、WTPという団体に出会えたことは奇跡だと感じています。
Q WTPでの活動と仕事のつながりを感じるエピソードを教えてください！

A 途上国の現場の風景からいかに学ぶか、という視点はWTPでの活動でも役立っていると感じます。移動中の窓から見える町並み、教師の表情や教授法、子どもの身なりや読み書きレベル、住まいや衛生環境、道路や水道などのインフラの質。目に映る風景や人々の姿に感度を集中し、統計や社会指標と照らし合わせて、現場の課題を把握するという途上国開発の仕事で覚えたこの習慣は、WTPの活動モニタリングや新し

い企画を検討する上で役に立てるかと思っています。最近、映画の教育的効果やコミュニケーション効果など、よりマクロな視点でアンテナを張ることを意識しています。これまでの経験で少しでも貢献できれば嬉しいです。
Q 今後、WTPでどのような活動をしていきたいか教えてください！

A 映画はアートであり、娯楽であり、また、教育的媒体でもあります。情緒的な心や想像力、道徳的な意識、個性的な表現力を豊かにする情操教育のツールとして、映画の役割が期待されています。さらに、様々な理由で感情を抑制されている子どもの心理的不安を和らげる媒体として、映画が貢献できる要素があるのではと思っています。自閉症の障害で心を開かなかつた少年が、ディズニーマニアのアニメ映画を観て、脇役の登場人物に自分の姿を重ね、言葉が発するようになったという実話は、その顕著な例かと感じます。映画を通じて、紛争地や被災地の緊急下の子ども、また特別なケアが必要な子どもにも支援ができる機会があればと考えています。

大学卒業後、国際協力機構（JICA）に入籍。中南米や東アフリカにおける開発援助の実務経験を経た後、シンクタンクにて勤務。要保護児童の社会的養護や障害児・者の教育・福祉分野での政策制度に関わる他、国際協力プロジェクトの評価や国際機関などの調査事業に従事。趣味は、スノーボードや沢登りなどアウトドア、書道、アコーディオン弾き。東京外国語大学卒、一橋大学 国際・公共政策大学院修了、社会福祉士。これまでコロンビア・ブラジル・ケニアに在住し、ラテン音楽と犬をこよなく愛する。

5. 古本寄付

読み終えた本が途上国で生活する子どもたちの夢の始まりとなります

本棚お助け隊を運営している株式会社ブギの菅原さまよりお声をいただき、古本チャリティ募金をスタートいたしました。不要となった本を【本棚お助け隊】にお送りいただくと、査定金額がWTPの支援金となり、間接的に途上国の子どもたちへ映画を届けることができます。東京都文京区に籍を置く本棚お助け隊（株式会社ブギ）さまは、「モノを活用した寄付文化をもっと身近に」というコンセプトのもと、様々な団体と協同し、社会問題の解決に取り組まれている素晴らしい会社です。



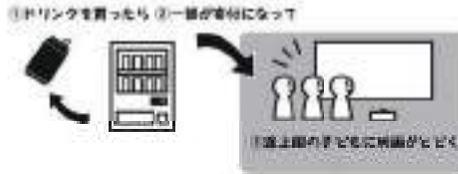
ブギさまのメッセージ

「古本チャリティ募金」は一人のお客様の声から始まりました。「どこか頑張っている団体に寄付してください」とそのような声の一つ一つ積み重ねられ「古本チャリティ募金」の仕組みができました。貧困を解消するため、差別をなくすため、子どもたちのため、より良い地球環境のため、戦いや争いのない日常のため、人々同士の共感を創り出すため、様々な分野で未来に挑む人々がいます。社会の一隅であっても本気で頑張っている人たちに共感できることはどんなにすてきでしょう。寄付や助け合いが身近にある日々はどんなに豊かでしょう。私たちがかつて与えられたものを、新たな誰かへ手渡してゆく。「もったいない」や「おたがいきさま」への共感のタネがあちこちでまかれ、芽吹き、大きく美しく実る未来。みんなで笑顔溢れる社会を創っていきましょう！

6. 寄付型自動販売機の設置

キリンビバレッジ株式会社 × World Theater Project

2017年度より、キリンビバレッジ株式会社さまとのコラボ自動販売機設置が進んでおります。ドリンクをご購入いただくと、売り上げの一部がWTPへの寄付となります。東京キリンビバレッジサービスにお勤めの門平さまより熱いメッセージとともにご提案いただき実現したこのプロジェクトですが、これまでに合計9台の自動販売機を設置いただいております。設置にご協力いただいておりますみなさまに、この場をお借りして心から感謝申し上げます。



設置をご検討いただける方は
こちらから

様々なご支援のカタチ

みなさまのあたたかいご支援により、

多くの途上国の子どもたちに映画を届けることができていること、心より感謝申し上げます。

私たちの活動はみなさまからのご支援により成り立っております。

世界中の子どもたちに映画を届けられるように、スタッフ一同、より一層邁進してまいりますので、

引き続きあたたかく見守ってくださいますと大変心強く、嬉しく思います。

1. 企業さまからの寄付・支援

様々な業界の企業さまより、自社商品のご提供、自社イベントにおける収益のご寄付、イベント会場のご提供、寄付型自動販売機の設置、その他協同事業など、様々な形でご支援をいただいております。

継続的なご支援、
誠にありがとうございます。



2. ギフトシネマ会員

World Theater Project では、月々 300円から子どもたちに映画体験を贈っていただく「ギフトシネマ会員」を募集しております。みなさまによるご支援で、これまでに約7万人の途上国の子どもたちに映画を届けることができております。



ギフトシネマ会員ご案内ページ

3. フィルとムーグッズ購入

“Buy One, Give One Cinema（商品を買くと、途上国の子どもに映画が届く）”をコンセプトに、フィルとムーのギフトアイテムを公式オンラインショップにて販売しております。マグカップやトートバッグ、チャームなど、グッズ製作担当者がアイデアを振り絞りながら製作した商品をご購入いただいで得た利益は、子どもたちに映画を届ける活動に活用させていただいております。2017年度にオープンしたフィルとムーオンラインショップですが、これまでにたくさんの方々にご利用いただき、多くの子どもたちに映画体験を届けることができていること、これからも様々な場所にフィルとムーを連れて行っていただけますと大変嬉しく存じます。



FILL and Moo
Buy One, Give One Cinema
フィルとムーオフィシャルサイト
<http://www.fillandmoo.co/>



吉祥寺フランス語学院合同会社さまからのご支援

吉祥寺にあるすてきなフランス語学校、吉祥寺フランス語学院さま。活動開始当初より、古本の寄付にご協力いただいたり、毎年1月に開催される開校記念パーティーの参加費を全額ご寄付いただくなど、あたたかいご支援をいただいております。



ウシオ電機株式会社さまからのご支援

2018年度よりスタートした映画イベント企画「丸の内映画ナイト」において、夜景の見えるすてきなオフィスを会場として使用させていただいております。2ヶ月に一度程度開催している当イベントには、ウシオ電機の社員のみなさまにもご参加いただき、非常にありがたく思っております。



ギフトシネマ会員さまからの応援メッセージ

2016年からWTPを応援し、2018年にはカンボジアに同行して映画配達人を体験しました。映画を観ている子どもたちの笑顔はとても眩しく、それだけで感動しました。また、実際に、子どもたちに将来の夢を聞くと、やはりほとんどが医者と教師でした。WTPは、普段日本に暮らしてはあまり考えることのない課題や、感じることはない経験を与えてくれると思います。これからもWTPが末永く継続していけるよう、陰ながら応援しております。

弁護士法人ネクスパート法律事務所 代表弁護士 寺垣俊介さま



2018年度にご支援・ご協力いただいた企業・団体さま

株式会社ソーケン	大江橋経営	しろひげ在宅診療所
株式会社オーエス	株式会社バリュープレス	社会福祉法人きらめき会
株式会社学研ホールディングス	テラサイクルジャパン合同会社	吉祥寺フランス語学院合同会社
株式会社東京現像所	ウシオ電機株式会社	チャンネルオリジナル株式会社
株式会社白組	ジャパンシステム株式会社	boum
株式会社トムス・エンタテインメント	株式会社ジェイフィール	SHERPA COFFEE
株式会社新日本映画社	キリンビバレッジ株式会社	弁護士法人ネクスパート法律事務所
株式会社ファンタクリエーション	医療法人社団げんき会 げんきらいふ	株式会社ブギ（本棚お助け隊）
株式会社ウィット	クリニック	パルシネマしんこうえん

(敬称略・順不同)

私たちの活動は、多くの方々のご支援で成り立っております。

みなさまのご支援により、途上国の子どもたちに

映画体験を届けられておりますこと、あらためて感謝申し上げます。

誠にありがとうございました。



ジャパンシステム株式会社さまからのご支援

2017年度に寄付型自動販売機を設置させていただいたことを皮切りに、ジャパンシステムさまにはイベント開催のための会場のご提供や、社員さまのファミリーデーにお招きいただき『映画の妖精 フィルとムー』を上映させていただくなど、様々な形でご支援いただいております。ファミリーデー当日には、社員のみなさまにフィルとムーのグッズをご購入いただくなど、大変あたたかなご支援を頂戴いたしました。



株式会社オーエスさまからのご支援

スクリーンをはじめとした映像環境を企業、教育、流通などあらゆるシーンで企画・施工まで行っている株式会社オーエスさま。活動開始初期よりカンボジアでの活動を応援いただき、スクリーンやプロジェクター、ソーラーパネルなどをご提供いただきました。2018年度には、寄付型自販機を東京と大阪のオフィスにご導入いただきました。自販機の導入について広報の藤枝さまから、「社員みんなで応援できることが嬉しい」とあたたかいお言葉をいただきました。

2018年度 貸借対照表 (2019年3月31日 現在)

(単位:円)

科 目	金 額	小計・合計
【A】 資産の部		2,217,285
1 流動資産		2,217,285
現金預金	2,217,285	
流動資産合計・・・①		0
2 固定資産		0
(1) 有形固定資産		
(2) 無形固定資産		
(3) 投資その他の資産		
固定資産合計・・・②		
【A】 資産合計 ①+②		2,217,285
【B-1】 負債の部		0
1 流動負債		0
流動負債合計・・・③		0
2 固定負債		0
固定負債合計・・・④		0
負債合計 ③+④		0
【B-2】 正味財産の部		
前期繰越正味財産額	4,091,593	
当期正味財産増減額	-1,874,308	
正味財産合計		2,217,285
【B】 負債及び正味財産合計 【B-1】+【B-2】		2,217,285

みなさまからのご支援のおかげで、多くの子どもたちに映画を届けることができました

NPO法人 World Theater Project より 感謝の気持ちを込めまして



2018年度 活動計算書 (2018年4月1日 から 2019年3月31日 まで)

(単位:円)

科 目	金 額	小計・合計
【A】 経常収益		
1 受取会費		1,366,320
正会員受取会費	72,000	
賛助会員受取会費	1,294,320	
2 受取寄附金		429,571
受取寄附金	429,571	
3 受取助成金等		150,000
受取補助金	150,000	
4 事業収益		4,998,294
イベント事業収益	109,814	
グッズ販売事業収益	1,941,979	
上映事業収益	2,072,676	
その他事業収益	873,825	
5 その他の収益		24
受取利息	24	
経常収益計		6,944,209
【B】 経常費用		
1 事業費		
(1) 人件費		
給料手当	0	
役員報酬	0	
退職給付費用	0	
福利厚生費	0	
(2) その他経費		8,715,404
現地上映費	2,177,893	
現地機材費	514,388	
現地交通費	175,107	
作品使用料(事務手数料)	226,800	
イベント開催費	314,252	
非劇場上映開催費	854,600	
販促物製作費	1,184,582	
グッズ制作費	978,679	
広報費	759,928	
諸謝礼	410,000	
送料	345,880	
支払手数料	24,084	
雑費	611,160	
関連書籍	138,050	
事業費計		8,715,404
2 管理費		
(1) 人件費		
役員報酬	0	
給料手当	0	
退職給付費用	0	
福利厚生費	0	
(2) その他経費		103,113
システム利用料	54,948	
旅費交通費	48,165	
管理費計		103,113
経常費用計		8,818,517
当期経常増減額 【A】-【B】・・・①		-1,874,308
【C】 経常外収益		0
固定資産売却益		
過年度損益修正益		
経常外収益計		0
【D】 経常外費用		
固定資産売却損		
災害損失		
過年度損益修正損		
経常外費用計		0
当期経常外増減額 【c】-【D】・・・②		0
税引前当期正味財産増減額 ①+②・・・③		-1,874,308
法人税、住民税及び事業税・・・④		
前期繰越正味財産額・・・⑤		4,091,593
次期繰越正味財産額 ③-④+⑤		2,217,285

 途上国の子どもたちに映画を

World Theater Project

 <https://worldtheater-pj.net>

 info@worldtheater-pj.net

 @catic0901

 worldtheaterproject

 @world_theater_project